金丸弘美の

食と農が地域をつくる

連載 第6回

グリーン・ツーリズムで農村の価値を再発見

～大分県宇佐市安心院町

農家での宿泊を拠点に旅行をするグリーン・ツーリズム。ヨーロッパでは、農家にとっては経営のひとつとして、一般客には旅行形態のひとつとして、すでに一般的になっている。今、日本でも各地での取り組みが始まっている。なかでも、よく知られるようになったのが大分県宇佐市安心院（あじむまち）町だ。

安心院町は2005年の市町村合併前までは人口8,000人ほどの町で、山々に囲まれた盆地にある。由布院から車で30分ほどでたどりつく。かつては養蚕が盛んだったところだ。

今は、日本におけるグリーン・ツーリズム発祥の地として知られている。取り組みが始まったのは1996年から。先進地のドイツの研修や受け入れのための学習会などを行ってきた。

現在は、町の4 つの地区の農家や兼業農家50戸が、一般のお客や子どもたちの農業体験、修学旅行を迎え入れている。02年、旅館や民宿のように旅館業でなくても宿泊ができるように規制緩和がされたことで可能となった。

ドイツの農村に学び、取り入れる

安心院のグリーン・ツーリズムの運営は、1996年に設立された安心院町グリーンツーリズム研究会が行っている。04年よりNPO法人となった。代表はブドウ農家の宮田静一さんだ。

宮田さんによると、17年前に県から話がありアグリツーリズム研究会を始めたが、4年後にグリーンツーリズム研究会として新発進した。その後、参加した会員が毎月4,000円を積み立て、順繰りに研修に行くという「講」方式でドイツに行き、本格的な取り組みが始まったという。

「ドイツの農村はゴミひとつ落ちておらず、景観が美しいのに圧倒されました。美しい街並みに人がやって来る。地域にお金が落ちる。ドイツで『過疎はないのか？』と尋ねたら、言葉そのものがないと聞いて驚いた。ぜひ産業にしたいと思った。でないと、山間地の農業は、このままでは疲弊してしまう。これはぜったいにやるべきと思いました。当時、町の議員さんに『ドイツのマネをするのか』

1 年間の研修や保健所への申請を行い、会員が認めた農家には「農泊・推奨の証」のプレートが交付される

宮崎県綾町の研修生を手づくり料理で迎えた時枝仁子さんの農家。古い農家をそのまま生かして改築し、宿泊できるようにした。ゆったりとしたたたずまいは一般客にもたいへんな人気だ

NPOの事務局をあずかる田口正継さん。ツーリズムは一般客、韓国、中国など1グループ30人ほどで、月に10件ほどの要請がくるという

安心院町グリーンツーリズム研究会会長の宮田静一さん

中国の子どもたちにパンづくり体験をさせる時枝仁子さん。年間400〜500人を受け入れている

時枝哲朗さんの指導で、竹を切りだし箸づくりをする中国の子どもたち

中山ミヤ子さんは、自家野菜約40種類やドジョウなどを使った手づくり料理が自慢。年間800人も泊まりに来るという

と言われた。悔しくて『マネをしようにもマネができないほどドイツは進んでます』と言った。すると商工会長さんが『あきらめんで50年かけてやればいい』とおっしゃって、とても救われました」

当時は、グリーン・ツーリズムは、野原で行う音楽とかチューインガムの一種とか誤解されて、説明するのに苦労したそうだ。

NPOの運営の中心は、今年の6月から入った田口正継さんが担っている。それまでは、広告代理店と保険会社の仕事を経験した。実家が近くだったこともあり、口説かれて現在の仕事を始めた。

「人と人とのふれあいがおもしろい。生徒に『楽しかった、また来たい』と言われたり、田舎のよさを褒められるとうれしいですね。たった1泊だけど感激で涙を流す子もいる。そのときやってよかったと思う。ひょっとして天職ではとも思います」

年間の受け入れは6,000人ほど。現在、断らざるをえないほど申し込みがあるという。

韓国や中国の子どもたちの参加も盛ん

筆者が安心院を訪ねた日には、中国の小学生たちが体験ツアーで訪れていた。日本の自然にふれようと、農家での農業体験ができる安心院が選ばれたそうだ。中国からの子どもたちの受け入れは今年度で3回目。また、お隣の韓国からは、子どもたちに加えて大人の研修もとても多いという。

大分県企画振興部の直山たかしさんによると、「05年に、大分県は中国の無錫（むしゃく）、宜興（ぎこう）、江陰（こういん）と観光客がお互い訪問し交流をする観光協定を結びました。別府、杵築（きつき）などで受け入れを始めた。安心院は初めて。ここ2〜3年、中国でも、修学旅行で農村体験が求められていて、今回の試みとなった」という。

たいへん好評だったことから、今後も中国の子どもたちを日本の農家に迎え入れていくそうだ。

農家1戸当たり4〜6人の子どもたちを泊める。そして、牛に触れたり、竹を切って箸（はし）を作ったり、田んぼでオタマジャクシをとったり、パンづくりをしたり、川遊びをしたりと、農家でひとときを楽しむ。また、日本の農家の家そのものが珍しいとあって、興味津々で目を輝かせて楽しんでいる。

日本の山村で、大きな国際交流が始まっている。

嫌だった田舎が素敵なところに……地域の宝を発見！

山村で4年前から農家民泊を始めたという江藤憲子さんの笑顔と言葉がとても印象的だった。

「私は、19歳のときに何もわからずに農家に嫁い

矢野英子さんの豆腐づくりの指導のあと、みんなで食事会。会話がはずむ

豆腐づくりの指導をする矢野英子さん（左から2人目）

グリーン・ツーリズムを最初から応援してきた本多義一さん・雅子さん夫妻。義一さんは、当時積み立ての会計を担当し裏から支えてきた。雅子さんは、広報担当として新聞の発行をしてきた

年に5回実施されるグリーンツーリズム実践大学講座で、自分の家が載ったポスターを指さす江藤憲子さん

で来ました。すごい山奥だった。毎日働いて、子育てをして、家からも出ることができなかった。お姑（しゅうと）さんは、うちで子育てして働いてさえいれば機嫌がよかった。仕事をするだけで気晴らしもなかった。外に出かけることもありませんでした。なんでこんな田舎に来たのだろうと、嫌で嫌でしかたなかった。娘からも、こんな田舎にどうして嫁に来たのと言われていた。そんなときに農村民泊をしませんかと、お誘いがあった。主人も年をとってきて、このまま農業を続けられない。主人からやってみようと言ってくれた。

子どもたちを泊めたら、よその子どもたちが、私たちの田舎の風景や森や暮らしをすばらしいと褒めてくれる。来た人の喜びがやりがいになった。嫌だった田舎が素敵なところだと気づかされた。それで、自分たちの宝を発見した。それに、町のほかの民泊をしているみなさんと知り合いになり、農家が集まっての研修や勉強会も楽しみです。もう生きがいになりましたね。ほんとにグリーン・ツーリズムをやってよかった」

農家で子どもたちを体験させるということが、子どもの食育や教育のためだとばかり思っていたら、じつは、子どもたちの視点が農村の価値の再発見に繋（つな）がり、逆に、農家の人たちに生きがいと元気を与える大きな力になっていたのである。

学びの場が交流の場に

現在、安心院では、参加の農家同士での、年に5回の勉強会が行われている。もてなすための料理や体験のやり方をお互いに学んだりするためだ。それが、それぞれの農家の民泊の質的向上になっているばかりか、大きな農家同士のコミュニケーションの場にもなっている。

農家民泊を最初に始めたひとりで、元学校の校長先生だった矢野俊彦さん・英子さん夫妻のところでは、地元の大豆を使った豆腐づくりが行われた。農家の主婦の人たちが集まって、英子さんに手づくり豆腐の作り方を学ぶ。そのあとに豆腐を中心に地元の農産物を使った昼食となった。そのなごやかな雰囲気が、宿泊客を喜ばせている大きな農村の魅力の源に繋がっているのだろう。

金丸弘美
（かなまる・ひろみ）

食総合プロデューサー。食のワークショップのプランニング、幼稚園から大学まで各学校での食の講座などをてがける。総務省地域力創造アドバイザー。著書に『創造的な食育ワークショップ』（岩波書店）、『給食で育つ賢い子ども』（木楽舎）ほか多数。